

戦跡を歩く 12

沖縄戦終結から73年を迎え、戦争体験者が少なくなるなか、沖縄戦の記憶をいかに引き継ぐかが課題となっています。シリーズ12回目の今回は、真壁で沖縄戦を体験した当時数え19歳の女性の体験を紹介します。

73年前の真壁では何があったのか。証言に耳を傾け考えてみませんか。



真壁公園から見える真壁集落

なんで戦争するのか。何が欲しくてかね。

～喜納ツヨさんの戦争体験～

戦争のはじまり

私の家族はお父さんとお母さん、きょうだい5人いて、おうちは農業をしていたよ。私は真壁尋常高等小学校を卒業してから、実家の畑仕事を手伝っていた。サーターヤで日雇いの仕事もした。お金がない時代だったから、たくさん働いたよ。

戦争が近づくと、お兄さん2人は兵隊に行った。私は徴用で、小禄飛行場で4、5回、炊事や滑走路造りの手伝いをしたよ。10・10空襲の日も、私は飛行場にいたから、摩文仁の人と一緒に、夜通し歩いて逃げた。怖くて小禄飛行場にはもう行かなくなったね。これが戦争のはじまり。

避難と追い出し

それからは真壁にいたけれど、やがてアメリカカーの

中城へ

船が米須の前浜のあたりまで来て、カンポーがドンキンドンキン撃たれるようになった。太鼓みたいな、踊りみたいな感じだったよ。だから私たちは、親戚と一緒にアンガーに避難した。アンガーは中に水があるから人でいっぱい、私たちは入口の方にいたよ。ご飯はおうちに帰らないと作れないから、朝早くにお父さんと一緒に帰ったよ。

この時は戦車断崖といって、アメリカカーの戦車を邪魔する石垣を積みされた。区長が毎朝来て、「アメリカカーはもう物資がないから、弾がカビダマー(紙の弾)になっっている」なんて言うからね、日本は勝つって信じて頑張ったよ。

でも、ある日友軍が来てね。軍に協力する字の人から、アンガーは軍が使うから出なさいと言われた。それからはもう、親戚とはチリチリバラバラ。

再び真壁で

それから私たち家族は中城に行くことにした。向こうの親戚を頼ってね。与座から東風平、与那原、西原を抜けて、今の成田山まで行った。私は荷物をたくさん持って、お母さんは5歳の妹をおんぶして。お父さんはもつこに荷物を詰めて担いでね。夜中に歩いていると、照明弾がパツとして苦勞して行ったのに、誰にも会えなかったよ。

だからまた夜中に歩いて、すぐ真壁に帰った。帰りは与那原に向かう途中の橋が崩れていて、大変だったよ。どれくらいかかったか、日にちもわからないけれど、一晩のうちじゃなかったかね。

捕虜になって

捕虜になってみると、アメリカカーは親切だったよ。私たちにビスケットをくれるために、かじって見せた。りね。それでも怖かった。GMCに乗せられて、伊敷から真栄里に運ばれたけれど、アメリカカーがあちこちでチリを燃やすわけ。自分も焼かれるのかと思ったよ。

真栄里から潮平に行くと、知り合いがたくさんいて、この時やつと安心したよ。

私たちはそのあと、宜野湾市の野嵩、山原の古知屋次に名城に移って、やつと真壁に戻った。私の怪我は、しばらく三角巾で吊っていたよ。その時、着物の袖を抜くけれど、年頃の19歳だ

からね、肌がみえるのが恥ずかしくてきつかったね。

戦争は本当に大変

戦争が終わって、誰が元気がって話をしたけれどね。ほとんどいない。一緒に遊んだ仲間が、男も女も相当亡くなった。戦争は本当に大変だよ。偉い人は皆隠れて、子どもと年寄りと女、皆亡くなるもの。なんで戦争するのか。何が欲しくてかね。

沖縄戦における糸満市の情報は「糸満市史 資料編7 戦時資料上巻」「同下巻」で紹介しています。
問い合わせ 生涯学習課
☎840・8163

人物紹介



きな 喜納 ツヨさん(90歳)

1927(昭和2)年生まれ。真壁出身。現在は子や孫に恵まれ、地域の知恵袋として充実した日々を過ごしている。これまで家族にも沖縄戦の経験話すことはなかったが、戦後73年を迎え、その経験を子どもたちや地域に残すため語ってくれた。

戦跡紹介



アンガー

集落北側にある自然壕で、中にカー(井泉)がある。戦時中は多くの人々がここに避難していた。



シラカー

集落南側にあるカー。水量が多く、普段はほかのカーを使う人も、水不足の時にはここに来た。喜納さんが隠れた壕はカーの上にあった。